

東京大学大学院人文社会系研究科
「次世代人文社会学育成プログラム」による派遣
帰国報告

(最終報告日本語版提出日：2011年2月16日)

I 派遣生の基本情報

氏名：神田 惟

所属研究室：人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学研究室

平成22年度時点の学年：修士課程1年

派遣形態：平成22年度夏学期個人派遣

II 研究テーマ

日本語：イラン陶器と銘文との関わり

III 派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名：イラン・イスラム共和国

都市名：テヘラン

研究機関名：テヘラン大学附属ロガットナーメ・デホダー・ペルシア語研究国際センター

(2) 派遣期間

出発日：2010年12月5日

帰国日：2011年1月20日

総日数：46日間

IV 主な研究成果

(1) 計画の概要

テヘラン大学の語学研修機関ロガットナーメ・デホダー・ペルシア語研究国際センターにて、2010年12月11日より2011年1月19日の期間、1日3時間・週5日の日程で行われる冬期集中語学研修プログラムに参加し、自らの研究言語であるペルシア語の能力を研鑽することで、修士論文で研究の対象とする12-13世紀のイランの釉下黒彩フリットウェアにおいてしばしば記される銘文の解読を行う。さらに、テヘランのイラン考古学博物館等に収蔵された陶器、陶器タイルの用いられた建築、窯址の見学を行うことで、自らが今後美術史学的手法によりイスラム陶器の研究を続けていく際に役立てていく。

(2) 実際に達成された成果

① ペルシア語について

ロガットナーメ・デホダー・ペルシア語研究国際センターにて、「中級1」のコースを20点満点中18点の成績で修了した。渡航前に一通り文法は習得していたが、毎日ペルシア語で授業を受けることで、聴解と会話、および読解の能力が上がったように思う。ニーシャープールでの発掘地の視察の際など、ペルシア語は現地でお世話になった方とのコミュニケーションにおいて欠かせないものであった。

② 陶器に関する調査について

12月中、数回に分けて、テヘランのレザー・アッパースィー美術館およびアブ・ギーネ美術館において釉下彩フリットウェアを含む展示室の陶器全品の撮影を行った。12月23日～25日にはヤズドとシーラーズ、30～31日にはイスファハーンにおいて陶器タイルの用いられた建築の見学を行った。また、現地の研究者であり、現在はカーシャーン大学で教鞭をとる傍らテヘラン大学で博士論文を準備されている、アッバス・アクバリ氏とアポイントメントをとり、釉下彩フリットウェアを含むカーシャーンの陶器の銘文の問題についてご教示いただき、氏の紹介で1月6日～7日にカーシャーンにおいて現地の個人コレクターの方に陶片を見せていただいた。1月13日～14日にニーシャープールにおいて発掘地の視察を行い、1月17～18日にテヘランのイラン考古学博物館収蔵庫（イスラーム部門の常設展の展示室は2011年1月現在閉室中で、特別展のみが開催されている）においてニーシャープールから発掘された多彩釉刻線文陶器の実見調査を行った。また、テヘランのエンゲロブ広場周辺で、ペルシア語で書かれたイスラーム美術（おもに陶器）に関する研究書の購入も行った。

(3) 今後の研究展望

テヘランのレザー・アッパースィー美術館およびアブ・ギーネ美術館で撮影したイランの釉下彩フリットウェアとされるコレクションの写真を整理し、修士論文で目標とする、イスラーム地域の釉下彩陶器の制作地・年代の判定基準の確立に役立てる。ペルシア語の銘文は、しばしば、釉下彩陶器と同時期に制作されたラスター彩陶器やミーナーイー陶器にも出現するが、このような同時代の他種の陶器にも出現するフレーズを抽出し、それが流行した期間を探ることで年代の判定基準に役立つのではないかと考えている。日本でこれまで入手することのできなかったイランの研究者による関連論文、研究書を読み進めることも今後の課題である。

合わせて、ニーシャープールにおける発掘地の視察、テヘランのイラン考古学博物館収蔵庫における来歴が確実な陶片の調査によって得られた情報を元に、卒業論文「ニーシャープールの多彩釉刻線文陶器の分類」の加筆・修正を行っていきたい。なお、この成果に関しては2011

年1月29日に早稲田大学イスラーム考古学研究所の拠点強化事業『「モノ」から見た知の技術と生活文化の変容と交流』第2回研究会にて発表を行った。